

フランシス・イライザ・ホジソン・バーネット作
佐藤志敦訳

わたしのロビン

My Robin, by Frances Eliza Hodgson Burnett, Translated by Shinobu Sato

読者のみなさんから手紙をたくさんいただくのですが、その中に、とても強く印象に残るものがあります。なかでも、去年の春、うれしいことをたくさん書いてくれた手紙がありました。おまけに、素敵な質問があつたのです。わたしが書いた『秘密の花園』を読んで、読者の彼女はこんなふうにしたのです。

「ほんもののコマドリがいつしょにいるんでしょう？ だって、あの子が空想から生まれたなんて、とても考えられません。きつと、あなただけのコマドリがいるんですね」

この手紙を読んで、ぶるぶるっと身体がふるえました。ええ、そのとおり、わたしはイングリッシュ・ロビンというコマドリと、心を通わせるほど仲良しになりました。どんなふうにもロビン君と親しくなったのか、彼女には返事を書いてできるだけ説明したのですが、これから、みなさんにもくわしくお話ししますね。

ロビン君はわたしのものではありません。わたしがロビン君のもの 　いいえ、そうではなくて、きつと、お互いにお互いを自分のもの、と思っていたのかもしれない。彼は、イングリッシュ・ロビンと呼ばれるコマドリの仲間でしたが、わたしにとってはただの小鳥ではなく、ひとりの「人間」でした。

イングリッシュ・ロビンはみなさんが知っているアメリカ・ロビンとはだいぶ違って、います。もっと小さくて、体型もまったく違い、身体つきは優雅に丸くふっくらしていて、脚は繊細でほっそりとしています。身のこなしも驚くほど魅力的で、上品で、まるで小さな貴族のようなのです。瞳は大きく黒々と、露にぬれたようですし、丸くふくらんだ胸にはぴったりとした赤いサテンのチョッキを着ていて、頭を上にな下に振るしぐさも、翼の動きひとつひとつも、心に強く訴えかけてくるのです。

それに、かなりのうぬぼれ屋で　おまけに、とても知りたがり屋で　なにがなんでもみんなの注意を引きつけておきたくてたまりません。もし自分より格好も良くなく賢くもないものが人目を引くものなら、ひどいやきもちを焼いてしまいます。そうです、こ

ういうときのロビン君ときたら、あまりにも可愛らしくて、だれもがうっとり見とれてしまうのです。おわかりでしょう、コマドリと仲良しになることは　つまり、ロビン君のようなイングリッシュ・ロビンと仲良しになるには、こちらも賢くなって飽きられないよう勉強しておかなければならないのです。

このお話のロビン君は、イギリスのケント州にあるわたしのバラの花園に住んでいました。花園の中で卵からかえったので、少なくとも生まれ初めての夏が終わるまでは、花園の外に別の世界があるなんて思ってもいかなかったでしょう。そこは不思議な美しさをたたえた場所で、外の世界とは、古ぼけた赤いレンガの壁や月桂樹の生け垣で仕切られていていました。そして、レンガの壁の外側にはきちんと手入れをした果物の木が何本も植えてあり、生け垣の向こうには雑木林が広がっていました。

わたしはいつも、花園にある幹の曲がった年老いた木の木陰に坐り、お話を書いていたのです。その木にはびっしり苔が生えて灰色に見えましたが、つるばらが全体を包むように絡まっていました。街から遠く離れていたので、静けさにそっと包まれ、まるで夢のように素晴らしいところだったのです。こうして書いていると花園のことをもつとお話しなくなりませんが、今は、ロビン君のことをお伝えしますね。花園の話は、また今度にしましょう。

このバラの花園には、翼のある子や毛皮を着た子がたくさんいましたが、わたしが本当に静かに坐っていたので、だれもわたしのことなどちっとも気にしていませんでした。ですから、ある夏の朝、愛らしい小鳥が一、二メートルほど先の草の間でぴんぴんはねているのを見つけたときも、それほど驚きはしなかったのです。

びっくりしたのは近くにいたことではなくて、すぐに飛んでいってしまったこと。いいえ、なにか思いめぐらせているようすで小さくびんびんとびはねながら、わたしを見つめていたことでした。それも、びくびくしながら盗み見ているのではなく、人間が、初めて会った人とちよっとお近づきになってみようかと、考えているような感じなのです。

あとになってはっきりわかったのですが、ロビン君は、わたしが人間だとは知らなかったのです。花園の世界で人間に会ったのは、わたしが初めてでした。だから、種類は違うけれど、わたしのこともコマドリだと思ったのでしょう。ええ、そうなんです。だれにも内緒ですが、わたしもコマドリなんですよ。その証拠に、わたしには「じつ」としていることができました。愛らしい野生の生きものが近づいてきたときには、とても静かにして、みんながうっとりするほどの優しい気持ちで迎えることができたのです。

「どうやってその子と仲良くなったの？」

ひと月ほどたってから、ある人にそう聞かれました。

「どうやって？　よくわからないわ」と、わたしは答えました。

「ただ、とても静かにして、自分をコマドリだと思っていただけなの」

小さな野生の生きものは、とても臆病で傷つきやすいものです。そんな子たちに何がしてあげられると思いますか？ そうですね、できるだけ優しく接することです。驚かせたり、「危ない目にあいそうだ」と思わせたりしないように、細心の注意を払ってあげてください。そして、その子が何を望んでいるのか、怖がってはいないか、どうして欲しいのか、相手の気持ちをわかってあげたいと心から思えば、だれでも少しの間だけ、いつもとは違う特別な能力が使えるようになります。そして、言葉を使わなくても気持ちを伝えあうことができるようになるのです。

坐って小鳥を観察しながら、わたしはじっとして、ちょうどそんなふうに感じていました。はじめから、その子がコマドリだと知っていたわけではありません。本当は、もう少し大きくならないとコマドリらしくはならないのですが、そういうことも知りませんでした。わかっていたのは、ツグミでも、ヒワでも、スズメでも、ムクドリでも、クロウタドリでもないということ。小さくて、色もはっきりとはしていなくて、胸もまだ赤くありませんでした。

わたしが坐って見つめていると、ちっとも怖がらずに向こうも見つめ返しました。ひょっとしたら、わたしに興味があるのかも知れない、そんなふうにも見えました。そして、ぴよんぴよん、ぴよんぴよんと、とびはねていたのです。

それは、ドキドキするような不思議な体験でした。この小鳥たちはみんな、わたしはちっとも危なくないとちゃんとわかっていましたが、それでも、ぴよんぴよんとびまわって、ずっとそばにいたりはいらないのです。もちろんちよつとの間なら、草や近くの枝にとまることは珍しくありませんが、さえずったり、ちいちい鳴いたり、せかせか動き回る金緑の虫をしつかり捕まえると、飛び去ってしまいます。こんなふう近くで人のようすをうかがったり、なにか考えこんだりすることもありませんでした。ひよつとしたら、思い切って仲良くなってみようと思いをだしているのかしら、それでこんなにびっくりするほど近づいてくるのかしら。そう思わせるようなこともなかったのです。

それに、愛鳥家の人たちからも、自分から近づいてくる小鳥の話など、一度も聞いたことがありませんでした。小鳥というものは大切にされ、こまやかに気を配った愛情があっではじめて、友だちになれるような生きものなのですから。

わたしはじっと動かず、優しい気持ちで待っていました。もっと一緒にいてくれるかしら？ 次のジャンプでもう少しこっちへ来てくれないかしら？ まあ、こっちへぴよんとしたわ。思わず息のみました。そして思ったのです。きつと、もっとそばに来てくれるはずよ。ほら、こっちへぴよん。もうひとつぴよん。ぴよん。とうとう、ロビン君は手を伸ばせば届きそうなくらい近づいて、そのまま、落ち着いたようすでわたしのすぐ足もとをとびはねていました。ちっとも怖がっていないのは、わたしをしつかりと見つめる目を見ればわかりました。

わたしたちは、こんなふうに出会ったのです。大騒ぎするほどのことではないと思いますか？ でも、愛らしい野生の生きものが近づいて来てくれるなんて、感動で全身がふるえるほどだったんです。

ぴくりとも動かないで、わたしは低く優しく、小さな音をたてはじめました。とても静かに、本当に優しくなるかのように、そう、赤ちゃんに話しかけるよりもっと優しく。その不思議な音で、心をつなぐ魔法をかけたかったです。そして、わたしがそうしている間にも、ロビン君ははねながら少し近づ寄ってきました。

「まあ！ そんなに近くまで来てくれるの？」わたしはささやきかけました。

「わかっているのね。わたしが手を出したり、ちょっとでも怖がらせたり絶対にしないで。本当は人間だからでしょう？ かわいいかわいい小鳥さんの姿をしているけれど、本当は人間だからわかるのね」

何年かあとになって、「この朝の出来事のおかげでわかったことがあります。『秘密の花園』の主人公のメアリーお嬢さんは、花園へ続く散歩道にしゃがんで「コマドリは鳴き声をまねしていた」とき、わたしと同じ気持ちだったのです。

ずっとささやき声で話していたのがコマドリの鳴き声のように聞こえたに違いありません。なぜって、ロビン君は面白そうに聞き入り、そして、とびっきりの奇跡が起こったのです。ぱつと羽ばたいて、わたしの膝から二メートルたらずの小さな木にとび移り、もっとお話ししようとも言うように、そこにちょこんと坐ったのですから。

もちろんわたしはぴくりとも動かず、ロビン君がくつろげるように、じっと坐って待ちました。素晴らしい宝物が目の前にあっても、指一本触れませんでした。

たぶん三十分ほど、わたしたちは一緒に過ごし、そしてロビン君は去っていきました。どこへ帰っていたのか、本当はいつだったのかもわかりません。バラの茂みの間をとびはねているうちに、いなくなってしまうのです。

ロビン君は出会ってからずっと、こういう魔法のようなやりかたで、わたしの前に現れたり、いつの間にかいなくなったりしました。そして、何か月もの間、とても仲よく過ごしたというのに、どこに住んでいるかは決して教えてくれなかったのです。わかっていたのはバラの花園の中だということだけ。臆病なせいではないのははっきりしています。あとでじっくり思い返してみても、わたしはある結論に達しました。

ロビン君はバラの花園で生まれ、そこが大好きでした。だから、家族が初めてレンガの壁の向こうの散歩道や、月桂樹の生け垣の向こうのキジのねぐらへ飛び立つときに、一緒に行こうとしなかったのです。そして、バラの世界にとどまり、いつしかひとりぼっちになりました。お父さんもお母さんも一緒にいた雑たちもいなくなって、孤独でさびしい気持ちになったことでしょう。そんなとき、見たことのない生きものを見つけたのです。

ここでもう一度はつきり言っておきたいのですが、ロビン君はその生きものを自分とは別の種類のコマドリだと思い込みました。そして、そのコマドリがどんなことを話すか

知りたくて、近寄ってきたのです。

その不思議なコマドリの仕草を見てみると、もっと見てみたい、近づいてみたいと勇気が出てきます。うまく説明はできないのだけれど、息をしたり動いたりすると優しくうつとりするような音をたてているのです。自分と仲良くなりたいたいという気持が伝わってきます。とても風変わりなコマドリで、すごく大きくて、ふつ々の巣にはまるでおさまりきらないし、飛ぶことすらできません。でも、意地悪そうなところは少しもありませんでした。本能的にわかりました。自分のことを気に入り、もっと一緒にいて欲しいと思っっているのです。そして、その優しさにふれていると、なんだかとてもほっとしました。ロビン君はその不思議なコマドリを好きになり、もうさびしくは感じませんでした。そして、きっとまた会いに来ようと思いました。

次の日は、夏の雨のせいで出かけられませんでした。そしてその翌日、わたしは朝のうちにバラの花園へ出かけ、いつもの木の下に腰かけてお話を書いていました。三十分もしないうちに、なにかを感じて目をあげました。すると、小さな、はっきりしない色合いの小鳥が、静かに草の間をとびはねていたのです。ぬれたような輝く瞳でこちらをじっと見つめているので、わたしのことをちゃんと覚えているのがわかりました。また来てくれるのです。自分から。なぜって、わたしたちはもう友だちだったから。

わたしたちの出会いには、小さな本にでもならなければお話するようなことではない、二人だけの秘密でした。あの瞬間から、わたしたちは、ほんの一瞬たりとも相手を疑うことはありませんでした。お互いをとても信頼していたのです。

毎朝、バラの花園へ行くとロビン君は会いにやってきて、大きさも形もふつうと違う、とても変わったコマドリについて、次々に新しい発見をしました。自分では気づいていませんでしたが、ロビン君はわたしに夢中だったのです。わたしがじっとして、愛情いっぱい優しいようにうすうすコマドリの鳴き声をまねると、毎日少しずつ近づいてきました。そして、とうとうある日、そっと立ち上がって花園を歩きまわると、わたしの後をびよんびよんついてくるようになったのです。

ロビン君がコマドリだと気づくまでには、少し時間がかかりました。鳥博士なら、ひと目で正体を見破るのですが、わたしにはそうはいきません。でも、ある朝のことです。ローレッティー・メシミーというサンゴ色のバラの花壇のところでかかっていると、ロビン君があ魔法のようなやりかたで、いつの間にかそばに来ていたのに気づきました。目をあげると草の中にいたので、立ち上がるのをやめました。そんなことをすれば何もかも台なしですからね。そして、ロビン君の胸のあたりが少し変わり始めているのを見つけたのです。そのときには赤というより黄褐色に近い感じでしたが、ロビン君は、自分の正体を明かしはじめていたのです。

「これ以上かくしたってだめよ。もうわかっているんだから。あなた、コマドリなのね」
わたしの勘はあたっていて、ロビン君は日に日にコマドリらしい姿が変わっていきまし

た。そして、ものの二週間もしないうちに、小さな身体にぴったりと合った、ぴかぴかの、真っ赤なサテンのチョッキを披露してくれたのです。まるで、初めておめかしした若者のように、少し大人っぽく見えました。動きかたも元気良くしつかりとできて、ときどき飛ぶ練習をしたり、さえずりのような音をたてたりはじめましたが、本格的に歌いだすのはもうしばらく先のようでした。

初めのうちは、いつの間にか足もとの草の間にひょいと現われていたロビン君でしたが、だんだんと、気持ちのいいすばやい羽ばたきを響かせてやって来るようになりました。そして、わたしの頭の上の大きな枝やすぐ近くの小枝にとまって優雅に首を傾けて、楽しくおしゃべりするのです。人間の言葉は話さなくても、わたしの言うことはちゃんと理解していました。

話すのはいつもわたしでした。たとえば あなたのことが大好きよ。赤いサテンのチョッキ、とてもお似合いね。なんて大きくて輝く瞳なのかしら。あなたの脚って繊細で優雅でほっそりしているわ。こんなふうに、いっぱいほめてあげたのです。ロビン君はそうやってほめられるのが大好きでしたが、いちばん嬉しかったのは、なんて言ったらいいかわからないくらい素敵よ、と言われることでした。わたしがうまく気を利かせたので、とても堂々とした気持ちになれたのです。

ある朝のこと その日は本当に気持ちよく晴れわたっていました。わたしたちはこのときも、ローレッティ・メシミーのそばでおしゃべりをしていて、ロビン君は、おだてられてとても気を良くしていました。そして、わたしの帽子を気に入ったようでした。白くて大きくて、帽子の山のところにぐるりとバラの花輪がついているのです。ロビン君が帽子をじっと見ている気がつき、あなたが気に入ってくれればと思って選んだのよ、とほのめかしました。

わたしは、両手いっぱいにはサンゴ色のバラを摘んで、ほんやりと花束を作っていました。すると、ロビン君は不意に翼をぱつと広げて飛び立ち、ほんのちょっとだけ羽ばたくと帽子のバラの間に止まったのです。わたしががぶっている、その帽子に。

そのとき、じっとしていたと思いますか？ 髪の毛のひとすじも動かしたでしょうか？ そのとおりです。息もつかずにじっとしていました。こんなに嬉しいことが起こるなんて、本当に信じられませんでした。

でも、すぐに気がつきました。ロビン君は、怖くて動けなくなるなんてことは、少しもなかったのです。とても安心しきっていました。つばの上をぴょんぴょんとびまわり、そつとつについてはバラの花を調べていました。わたしが帽子の下にいてくれるというだけで、怖くはなかったのです。わたしなら大丈夫だとよくわかっていました。そして、花園のある帽子について根ほり葉ほり調べつくして、軽々と飛び去って行きました。

そのことがあってから、わたしたちは毎日もっともっと仲良くなっていきました。わたしの眼と鼻の先にある梢にとまって、わたしがささやきかけるのを聞くようになりました。

そう、わたしの話を聞いて、ちゃんとちいぢい答えてくれたのです。そうとしか言いようがありませんでした。

わたしがお話を書いていると原稿用紙の上に舞い降りてきて、読もうとすることもありません。ロビン君はときどき気を悪くしたんですよ。字があまり下手くそで、なにが書いてあるのかわからないというのです。わたしの手からパンくずをついばみ、わたしが坐っている椅子や、肩の上にとまりました。ツタに覆われた花園の小さなドアを開けるとすぐに、可愛らしくてすばやい羽ばたきが聞こえ、ロビン君が出迎えてくれました。いつもどこからともなくあらわれ、どこへともなく姿を消すのです。

あの夏の間ずっと、ロビン君は本当にうっとりするほど魅力的でした。たぶん、彼は、ほんもののコマドリではなかったのです。きっと、妖精だったのでしょう。本当のことはだれにもわかりません。

わたしの家で開かれるお茶会の席では、ロビン君の話になるとみんな決まってわくわくしたものです。会ったことのない人もロビン君のことを知っていましたし、お客様はいらっしゃるなり、「バラの花園へ行って、あなたのロビン君に会えるかしら？」と尋ねるのが当たり前になりました。アメリカ人のお友だちのなかには、いたずら妖精のゴブリンが小鳥の姿に化けているのに違いないと言って「ゴブリン・ロビン君」と呼ぶ人もいたほどです。こんなに人間のことを知りたがる生きものが、ただの小鳥であるはずがないということです。

お客様を花園へお連れしたときには、ロビン君はそれはもつとつてもお行儀がよかったですよ。わたしが木の下に立って呼ぶと必ずやってきて来ましたが、一人のときのようになり、小さなドアを開けたとたん、そこでお出迎えしてくれることはありませんでした。お客様と一緒のときも近くにとまって話しをしてくれましたが、いつもとは違いました。すっかり心を許すのはわたしが一人のときだけ、と決めていたのです。

ロビン君がいつになつたらさえずり始めるのか、わたしはとても楽しみにしていました。そんなある朝、日差しがとても強くて木の葉をとおしても眩しく感じるほどだったので、大きな日本式の傘を立て、テーブルの上に日陰を作ってお話を書いていたのです。すると、ふいに、コマドリのさえずりが聞こえました。ふるえるような歌声が、少し離れた木のあたりから聞こえてきます。とても素敵だったので、身体を乗りだして歌い手がどこにいるのか確かめようと思いました。

すると、なんと嬉しいことでしょうか。歌い手は木にとまっていたわけではありません。大きな花のような傘の、竹でできた骨の端にいたのです。わたしのロビン君でした。そして、ロビン君は初めての歌を、わたしのために歌っていたのです。えっへん、どんなもんだい、とてもいいように。

遠くから聞こえるように感じたのは、不思議なことに、「くちばしを閉じたまま」歌っているせいでした。素敵で深紅ののどをふくらませたりふるわせたりして、そこにさえずり

を閉じ込めているかのようです。

コマドリが初めてさえする時は、いつもこんな具合なのかもしれません。よくわかりませんが、これがロビン君の最初のころの歌いかたでした。わたしのうっとりとした表情で、自分の歌がどんなに素敵なのかわかったに違いありません。わたしは、ほめたり、おだてたりしてロビン君を喜ばせました。きっと、自分が、この世で最初にさえずったコマドリだという気分になったことでしょう。とても嬉しそうにテーブルの上に降りてきて、ほめ言葉を聞きもらずまいとし、また、もっともっとほめてよと催促するのです。

何日もしないうちに、歌声は完ぺきなものになりました。もう低く遠い音ではなく、くちばしを開けて、高く低く、強く弱く、巧みに調子を変えながらみごとな歌声を響かせています。どんどん自信もついてきました。わたしが忙しそうにしていると、近くの枝にたまって身を乗り出し、誘うような歌声をはりあげて歌いだすのです。まるで、この世の中で、誰だってばくの歌声に耳を貸さないはずはない、とでもいつているようにでした。

もちろん、わたしは席を立ててロビン君が止まっている木の下まで行き、顔をあげてこう言うのです。なんて愛らしくて素敵で、うっとりするくらい素晴らしいのかしら。どんなに愛しているか、言葉にできないくらいだよ。ロビン君はそんなことを知っていて、それを大いに楽しんでいました。ロビン君の可愛らしい優雅な歌声は、わたしを夢中にさせる奥の手だったのですが、どんなに聞いても聞きあきることはありませんでした。毎日新しい歌を覚え、そのひとつひとつが前の歌よりもっと素晴らしくなっていくのですから。わたしがどんなにロビン君に首ったけで、ロビン君の思いのままなのか　ほかのコマドリに会って、そんな自慢話をすることがあったと思いますか？　わたしには、そうは思えません。それに、よそのコマドリが近寄ってくるとか、バラの花園を通りがかったときに挨拶でもしていこうかと、ちょっと立ち寄ることもありませんでした。ところがあるとき、とても奇妙な出来事が起こったのです。

(後半に続く)